

私のノートから

中島由美子

昨年12月11日早朝、渡良瀬河川敷から20機の熱気球が真っ青に晴れ上がった足利の空に上がり、音もなく漂っていた。「第2回両毛クリスマス・バルーン・フェスタ」の幕開けである。

サンタさんに扮したパイロットが乗った熱気球は風に乘って静かに西から東へ、子ども達が手を振ると降りて「メリークリスマス!」とお菓子をプレゼント。気球は、また舞い上がり子供達の輪を探す。「サンタが空から

を片手にはしゃぎ回る子供達の姿、2日間で多くの親子連れなど来場者で賑わった。第1回の一昨年の2万人を遥かに超えた手ごたえを感じた関係者も少なからず。会場に来られなくとも、街から、自宅から

人口約23万7000人の街で5日間で80万人の人出で賑わい、国内外から100機を超える熱気球が集まる。足利でも、多くの人の協力でここまで盛り上がった「両毛クリスマス・バルーン・フェスタ」、ただ単にお

トが成長すれば、その経済効果だけではない、多くの市民やその家族が参加し、その経験や思い出は、ふるさと足利への誇りや郷愁にもなると思う。「両毛クリスマス・バルーン・フェスタ」の名の通り、周辺の各自治体

経済効果と子どもに夢

★熱気球バルーンフェスタの展望★

熱気球を子供達に見せたい。夢を与えたい、熱気球で足利の交流人口を増やしたい、ふるさと足利を元気にしたい。この共通の思いを持った市民有志のボランティアの皆さん、そして、大勢の市民の皆さんがこの朝、皆、たた空を見上げていた。

やって来た」子ども達にとっては、まさにメルヘンの世界、夢が現実になった瞬間だった。夜は、昼とは違い、バーナーで照らし出された熱気球に幻想的なバルーンイリュージョン、会場は、風船

バルーンを見上げ、感動を味わった人の数も計り知れない。佐久市では、昨年18年目を迎える3日間で28万人が集まったが、初年度は3万人程度だったという。昨年31回目を迎えた佐賀市では、

祭りだけで終わらせたくない。佐賀市では、その経済効果は56億円(主催者発表)と見込まれている。期間中、会場付近にJRの臨時駅が設置されるほどである。規模は違っても、足利のこのイベン

などに参加を呼び掛ければ、更なる広がりも生まれ、さまざまな関わりが出現するかも知れない。昔から織物の街として栄え、人々の交流がらおもてなしの心を持った足利人気質、この

よくな貴重な足利の財産をバルーンに乗せて、まさに「足利浮揚」観光、経済、地域交流、市民の熱意をエネルギーに、足利市を高く高く昇らせたいもので

す。(足利市議会議員) 本欄等、本紙各欄への投稿を歓迎いたします。問い合わせは本紙編集部(☎21・1366代)までお気軽に。



右から2人目が筆者。足利市長、足利商工会議所正副会頭らと